

# 『おねーさんの耳はロボの耳』 完結編第二話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

10. 夕闇に消えて…

セリオの回収指示が出たことをまるで知らない浩之たちの生活には、一向に変わりがないように見えた。

あかりもはやセリオに余計な闘志は抱いておらず、マルチと一緒に仲良くやっていると言う様子だった。もちろん、それは表面上だけかも知れないが、少なくとも浩之の目には分からない。ただ単に「あかりもようやくセリオに慣れてくれた」としか思っていないのだ。

要は浩之が鈍いだけなのだが、セリオは浩之やマルチと違って、そんなあかりの心中も容易に読み取っていた。それを承知で浩之と暮らしているのだが、実際のところセリオの行動には微妙な変化があった。

積極的な部分が変わらないが、しつこく迫ると言うことはしない。また、浩之の本音を知りつつも、あえてそれに答えないこともある。先日のお風呂の一件もそんな行動の変化を示しているものだった。

それについて、浩之は鈍いなりに何かを感じているらしく、それとなくマルチに、

「最近のセリオってどこが変わったかな？」

と聞いてみたりしたが、それはマルチには分からないようで、

「すみません、よく分かりません…」

と困った表情で答えるだけだった。

そんなある日のこと。

居間でぼんやりとしている浩之にセリオが声を掛けた。

「浩之さん、買い物に行ってくるけど、何か食べたいものでもあるかしら？」

呼ばれて、ふと時計を見ると、午後五時を回っていた。ぼちぼち日も傾いて夕暮れ時と

言うところだが、近所のスーパーではタイムサービスとやらが始まっている頃合いだ。

「セリオ一人なのか？」

「マルチはお風呂を洗ってるし、あの子と一緒にだと時間がかかるから」

苦笑しながら答えるセリオの言葉の意味するところを、浩之は承知していた。

いつだったか、二人で買い物に出たら二時間近くかかったこともあるのだ。

どうしてそんなに時間がかかったのかと言えば、マルチがすぐにセリオを見失って迷子になっ

てしまいい、そのたびに騒動を起こしていたからなのだ。

「…なるほどね。そんじゃ、今日は俺と一緒にいっていいかな？」

突然の浩之の言葉に、セリオにしては珍しく動揺の色を見せていた。

「え？ 浩之さんが一緒に？」

セリオのそんな表情に一瞬どきっとした浩之だったが、すぐに気を取り直して言う。

「そ、そんなに変かよ？ マルチには留守番してもらえばいいだろ？」

「…あの子一人で大丈夫かしら？」

「心配なら、鍵を締めておけばいいさ。それにこの家のセキュリティはセリオも監視できるんだろ？」

山本がセリオ用のアンテナを設置した時に、ついでに家のセキュリティにセリオのシステムを接続しておいてくれたのを思い出しながら、浩之がなおも提案すると、セリオもようやく折れた。

「ま、確かにセキュリティもあるし、いくらマルチでも知らない人を勝手に上げたりはしないでしょうから、それでもいいわよ」

「そんじゃ、マルチにはそう言っておかきやな」

と言うなり、浩之は風呂場に行き、マルチに留守番を頼んだ。するとマルチは自信たっぷりの表情で、

「はい、留守番はわたし一人で大丈夫ですから、浩之さんは安心して買い物に行ってください」

と言い切るのだが、その表情に逆に不安を禁じ得ない浩之だった。

しかし、今さらセリオに「一人で行ってくれ」と言うつもりもないので、ここはマルチを信頼して、ついでにセキュリティを信頼して、更にはセリオの監視機構を信頼して、マルチに留守番を任せることにした。

「…そう言い切られた方が余計に心配なだけだな…ま、頼むよ」

こうして、浩之が再び居間に戻ると、セリオの姿はそこにはなかった。

「あれ？ セリオ？」

と呼ぶと、セリオはすでに外に出ていたらしく、居間の外から返事がする。

「浩之さん、こっち」

「…何やってんだ？」

と怪訝そうに尋ねる浩之に、セリオは微笑みながら答える。

「夕日がきれいだったから」

と言いながら、夕日を指差している。そんなセリオを見て、浩之は「何を言ってるんだよ」と笑いたくなくなった。

「そんな、何いっ…」

だが、それは途切れてしまった。

そして、言葉を失った浩之がしばし見とれていたのは、夕日に照らされたセリオの笑顔だった。

マルチの時にもそう感じたことがあったが、今のセリオのどこがロボットなんだろうかと、自分の目を思わず疑ってしまうほど自然で魅力的な笑顔だった。

HMX13型メイドロボット、セリオ。

そう、確かにセリオはメイドロボットなのだ。だが、時折見せる彼女の表情や仕種は、一人の女の子ではない…。そんなことを浩之は改めて感じていた。

「さーて、こんなことやっていると、欲しいものが買えなくなっちゃうわよ、浩之さん。ぼんやりしてて、今夜のおかずが寂しくなっても知らないわよ」

と、セリオがいつもの屈託ない笑顔を見せると、浩之もようやく動き出して、「ああ、そうだな。ま、俺はセリオの作ってくれたもんなら、何でも嬉しいけどね」

と返す。するとセリオは、

「あら、お世辞でも嬉しいわね、浩之さん。それじゃ、いつそのこと今夜は思い切りシンブルにしてみましようかしら？」

と、完全にいつものセリオの調子に戻っていた。

「い、いや、それはさすがに遠慮願いたいな…」

「冗談よ。ホントに浩之さんって可愛いんだから」

「…と、とにかく、さっさと行こうぜ」

やや圧倒されながらも、浩之もそんないつものセリオに対するいつもの口調でそれだけ言って、玄関へと回り、外に出た。もちろん鍵締めも忘れずに。

「今夜は何がいい？」

「そうだな…すこしずつ寒くなってきたから、なべ物でも食べたいかな？ 一人でなべ物ってのも変かも知れないけどな」

「そうね、ちよつと材料の分量とか難しいけど…。せつかくのご希望なんだから、それしましょう」

そんなことを話しながら、近所のスーパーに向かって歩き出したのだが、その会話がまるで同棲してる恋人か新婚さんのような気もするな…と浩之がふと感じた時。それは、さっきの夕日を見ていたセリオに対して感じたものと同じなのかも知れない。

「な、なあ、セリオ…」

ほんの少しだけ緊張しながら浩之がセリオに声を掛けた。最近変わったことがないかを直接聞こうと思ったからだ。だが、セリオの返事は冷たかった。

「何ですか？」

「あ……」

セリオの返事に一瞬表情を固まらせてしまう浩之。それを見つめるセリオの表情は無表情そのものだった。

「猫かぶりモードか……」

浩之がつぶやくように言うと、セリオは同じ表情のまま、

「申しわけありません」

と頭を下げる。そう言えばセリオと出掛けると言えば、HM研究所くらいであまりこうして一緒に外出したことがない。今さらながらの仕様に戸惑いながらも、浩之は質問を続けることにした。外に対する対応が違って、セリオ自身であることは変わらないはずだ。「いや、まあ、そのままでもいいから……。ちょっと聞きたいことがあるんだけど、いいかな？」

「はい」

「……何かあったのか？」

「申しわけありませんが、質問の主旨が理解できません」

「いや、最近のセリオって変って言うか、以前とちよつと違うと言うかな……」

セリオの対応に戸惑いを感じながら、浩之が自信なさげに続けると、

「どのように変だと思われませんか？ おっしゃってくださいれば、疑わしい箇所を重点的に診断いたします」

セリオは無表情のまま、そう答えた。もちろんそれは浩之が望んだ答えではない。この

状態のセリオにはいくら聞いても無駄だなど思った浩之は、がっくりと力をなくして、

「……やっぱり、いい」

とセリオに告げた。

「浩之さんのご希望に沿えず、誠に申しわけありません」

それに対しても猫かぶりセリオは頭を下げるのだった。

そして、それ以後浩之は買い物中にセリオに話し掛けることはなかった。聞きたいことは、家に帰ってから聞けばいいと思っていたからだが、果たしていつものセリオに聞いたところで、ちゃんと答えてくれるかどうかも怪しいところだ。

目的のスーパーに着いてなお、浩之は必要以上の会話をしなかったが、その混雑した店内をスイスイと歩いていくセリオを見つめながら、「これじゃマルチが追いつけないのも分かるよな…」と心底から納得していた。

ちなみに、買い物の内容には出掛けに言っていたなべ物の材料もちゃんと含まれていた。浩之はこの目の前にいるセリオが、あのセリオ本人であることを再認識したのだが、それでもやはり、

(どう見ても一緒には見えないよな…)

と思うのだった。

買い物を通り終えて、浩之とセリオが外にスーパーの外に出ると、すでに夕日は落ちてしまい、辺りは暗くなり始めていた。

「日が沈むのも早くなったな…」

浩之がそう言うのとセリオは、

「そうですね。季節の移り変わりもいいですけど、少し寂しいですね」

と言った。その表情は無表情のままだったが、言葉の内容は明らかにセリオならではのものだった。それに少し安心したのか、浩之はかすかに笑った後、

「あ、いけね。ついでに雑誌を買うつもりだったのを忘れてたよ。ちょっとそれだけ買ってくるから、セリオは待っててくれないか？」

いつもの浩之の調子で言った。するとセリオはすぐに、

「わたしが買ってきます」

と言うが、そんなことを言うのはは分かったので、浩之はそれを制止しながら、歩き出す。

「いっていいって、そんな…セリオに買わせるような雑誌じゃないし、すぐにすむし。

セリオはここで待っててくれよ」

「はい、かしこまりました」

セリオの返事を背中中で聞きながら、浩之は店に入って行った。

浩之がセリオに頼まなかった理由は、目的の雑誌がいわゆる青年誌であったためだ。そんなものを買に行かせたら、後でどんな攻撃をされるか分かったものではない。

雑誌の置いてあったコーナーに行き、目的の雑誌を買って、浩之が店の外に出てみると、先ほどセリオに待ってるように言った場所には誰もいなかった。

「セ、セリオ？」

浩之が辺りを見回してみたが、やはりセリオはいない。



待っててくれと言ったのに、いないはずがない。そう思いはしたが、同時にセリオの身があつたセリオであることを思い出した。

（まさか、俺を置いて先に帰ったとか？ まあ、あのセリオなら有り得ない話じゃないよな…）

そう思うと同時に、浩之は家に向かって走り出した。そうすれば、途中でセリオに追いつくだろうと考えたのだ。

だが、結局家に着くまでの間、セリオを見ることはなかった。

（ち、ちくしょー、わざわざ急いで帰って俺を脅かそうってんだな、セリオの奴…）

ずっと走ってきたため息を切らしながら、浩之がうらめしそうに玄関を見つめていたが、やはり後ろからもセリオが来そうな雰囲気はない。となれば、やはりすでに帰ってるに違いない。浩之はそう確信した。

（さて、と…。それじゃ、俺も家に入るとするか…）

と、玄関のドアノブに手を掛けると、これが回らない。鍵が掛かっているらしい。

（わざわざ鍵まで掛け直すとは…念が入ってるな）

セリオの意地悪の念入りさにほとほと感服しながら、浩之が鍵を開けて中に入ると、玄関にセリオの靴はなかった。

（ここまで来ると、ホントに凄いよな…）

浩之が玄関に入ると、それに気づいたマルチがやってきた。

「あ、浩之さん、お帰りなさいですー。思ったよりも早かったですねー  
にこやかに告げるマルチに、浩之は苦笑しながら聞き返す。

「マルチもとぼけるのが上手くなったな…。それで、セリオはどこに隠れてるんだ？」  
すると、マルチはきよんとした表情になった。

「あれ？ セリオおねーさんと浩之さん、一緒じゃなかったんですか？」

「何言ってるんだよ、マルチ。セリオはもう帰ってるだろ？ セリオに言われてそんなこと言ってるんだらうけど、もういいぜ…」

浩之がそう言うと、マルチはさっきよりも困惑した表情で答える。

「え？ セリオおねーさんは帰ってきてませんよ？ それに浩之さんの言ってることってよく分からないです…」

「何？ 帰ってきてない？ ホントにか、マルチ！」

急に浩之の語調がきつくなり、それに一瞬身をすくめるマルチ。

「わ、分かりません」

「分からないじゃないだろ？ 俺がセリオと出た後に、セリオは本当に帰ってきてないんだな？」

「は、はい…。あの後、戸締まりを確認して、わたしは居間でじっとしていたんですけど、この家に来たのは浩之さんだけです」

「どーゆーこっちゃ…」

「セリオおねーさん、どこかに行っちゃったんですか？」

心配そうに尋ねるマルチに対して、浩之は明確な返事を返すことができない。

本人から何の連絡もないし、いきなりいなくなるなんてこと自体考えられないのだから。

「そ、そうだ。電話も入ってないのか？」

「は、はい。何もありませんでしたよ」

最初はセリオのいたずらかと思っていたが、どうにも事態がそんな雰囲気ではなさそうだなと、浩之は感じていた。いくらいたずら心があつたとしても、ここまで心配させるのは捉破りと言うものだ。そんなことをセリオがわざわざするはずもないだろう。

「セリオ…まさか本当にいなかったのか？」

その結論はあまり出しくなかつたのだが、ことここに至っては疑いようがない。もしかしたらしばらくして帰ってくるかも知れないが、何故かその可能性が非常に低いような気がする。

何やらいやな予感を感じつつ、玄関に立ったまま外を見ている、やはりセリオの姿は見えない。いきなり現れて「心配した？」とか言いそうなものなのに、その声も誰かが近づいてくる物音もしない。

「セリオ……」

「おねーさん……」

心配そうにつぶやく二人。だが、その声がセリオに届くことはなかった。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第二話

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第二話

初版:1997/10/12

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/08